



鳥籠

岡本綺堂

(一)

お照といふ十六七の娘が秋の朝日に
白い横顔を照されながら、前に大溝の
流れてゐる店の頭で鳥の籠を洗つてゐ
た。籠の中には俗に飛びつ子云ふ鳥
立の眼鏡兎が低い聲で囀つてゐた。
お照も漸次に江戸の昔の唄を失つ
て、寂しい屋敷町の間に新しい町家
が五軒十軒ぐらゐつ、開かれた。こゝ
も古い屋敷長屋に手を入れて、前の大
溝に狭い板橋を架して、兎も鳥も往來
から出入の能るやうに拵へた二間開口
の雜貨店で、左の一間半は矢はり昔な
がらの日窓が葦丈な大きい口を四角に
開いてゐた。隣は小さい八百屋で、又



第一
其隣は大きい角屋敷であつた。屋敷の
内には江戸開府以來歴史を眼前に見て
來たらしい古い銀杏や大楓が上へも横
へも枝を張つて、塀外の往來にまで暗
い日陰を作つてゐるので、秋になるこ
近所では毎年其の落葉に悩まされた。
その秋も今年も既に彼岸に入つた。
隣の八百屋で賣つてゐる芒の糞葉が桶
に挿されながら秋風に靡いてゐるので
今夜は軒廊の十五夜であることが知れ
た。

第三
羽色は活如したやうに美しくなつて、
一尺二寸の竹籠の隅から隅を狭さうに
飛び廻つた。籠を洗つて餌を遣るのは
お照が毎日の役であつた。
お照は暖い日の影を惹ひながら
直接に強い日の光を浴びることを好ま
ない鳥であつた。お照は籠を把つて日
當りの好い硝子戸の蔭に懸けた。それ
から餌を取出して來て、乾した糞を

糞を頻に擦り混ぜてゐた。青味し
ては糸瓜の葉も刻まれた。
「貝津君、居ますか。」
中學の徽章の附いた制服を被つた十
三ぐらゐの少年が板橋の上に立つた。
「おや、須藤さんでございませうか。」
お照は嬉然に會禮しながら左の奥に
向つて聲をかけた。
「坊ちゃん、須藤さんが被入いまし
たよ。」

返事の代りに、彼の少年と同じ年頃
の男の兒の白い圓い顔が、日く窓から
現はれた。
「須藤君、入りたまへ。」
「さうぞお上り下さいませし。」「お照
も愛想の好い笑顔を裝つて、坊ちゃん
のお友達を迎ひ入た。
須藤君といふ少年は同じく笑ひな
がら入つて來た。店から上つて橋手の
奥に通るに、そこには南の窓から光線
を取つてゐる四疊半があつた。窓の下
には畳やインキの度で黒く赤く彩さら
れた古い机が据ゐられて、机の上には
現箱やインキや手帳や書物が秩序正
しく列べたり重ねたりしてあつた。小
さい硝子の邊には裏の空地で折つて來
たらしい白粉の花が一枝生けてあつた
机の傍には本箱があつて、その上にも
學校の教科書らしい和洋の幾冊が行儀
よく積まれてゐた。これに續いた柱に
は、矢はり中學の徽章の附いた制服や
草帽が懸けてあつた。天井も壁も襖も
壁も随分古びてゐて、全體が温つほい
温い氣分の中に、この一間は綺麗に
掃除されて、整然と片附いてゐて、住
んでゐる人達の氣風も大抵察しられた
。「君、數學の宿題は皆能たかい。」「
座るが早いから横に訊いた。
机の前に横向に座つてゐる主人の少
年は、圓い眼を更に大きく睜つた。
「む。昨夜遣つて見たけれど、さ
うしても此の第十五の問題が判らない
んだ。君は皆な能たの。」「彼は本箱
の上に重ねてある書物の中から一冊の
厚い教科書を取出した。叮嚀に其のべ
しじを繰つて第十五といふ問題の所を
指の前に出して見せた。

「僕にもそれが判らないんだ。」「
も笑ひ出した。「君に訊かうと思つて
來たんだが、君にも判らないかね。」「
ちやア、明日の朝早く學校へ行つて、
前田に訊かう。ね、君も然うし給へ。」「
お照は何時の間にか手を洗つて來て
この四疊半の奥についた六疊の間に
入つたが、やがて茶碗に番茶を汲んで
紙の上に乘せたビスケットを一所に持
つて來た。
「坊ちゃんがお屋敷へ上る、いつも
失禮ばかりして居ります。」「
格は年齢よりも優せた切口上で挨拶
した。それが何だか可笑かつたのであ
らう、お照は微笑んで袂を口に當てた。

可認物便郵種三第
お照が毎日の役であつた。
お照は暖い日の影を惹ひながら
直接に強い日の光を浴びることを好ま
ない鳥であつた。お照は籠を把つて日
當りの好い硝子戸の蔭に懸けた。それ
から餌を取出して來て、乾した糞を



鳥籠

岡本綺堂

(一)

坊ちやんは更に本箱から新しい少年雜誌を取り出して見せた。

「君。もう買ったの。」と、脩は直に手に取つて美しい彩色の表紙を眺めた。

それから口繪を一枚々々に餘念もなく見入つてゐた。

「君。こりやアウオスターールだね。」

「じ。龍騎兵が突貫するんだ。」

坊ちやんは少しく眉を昂て説明した。

「する。英吉利の兵は此地の方に入るんだね。」

「うう。ウエリントンが此地にゐるのさ。」

坊ちやんは圖の一方を指さした。



「僕。祖父さんに訊いたが、この龍騎兵が突貫して行つた時に、英吉利の兵は皆な折敷の構へをして、銃剣で敵の馬を突いたんだ。」

脩も負けず説明を加へた。

「馬を突かれちやア堪らないね。」

「堪らない。うう。」

脩は眼をうつて熱心に兵を談じてゐる二人の少年を、お照は黙つて見較べてゐた。

脩は活潑の少年であつた。醫學博士の孫で、醫學士の子で、立派な家に育てられてゐる。坊ちやんは同い年で二月違ひの兄であつた。男の兄ではあり、且は質素の家風なので、矢はり普通の紺飛白を着て、黒い兵児帯を締め、世間の子供と些とも變らないのであるが、それでも顔や容の何處やらに大家の子といふ氣品を備へてゐるのは、流石に争はれないものだ。お照は思つた。

それに較べると、家の坊ちやんも彼に負けないだけの服装をしてゐる。體格は少しく繊細いけれども、彼よりは色も白い、眼鼻立ちも好い、學校

の成績も彼よりは優れてゐる。この七月の第一學期試験にも、坊ちやんは六番で、彼は十番であつた。何の點から云つても坊ちやんの方が勝である。身最負をするではないが、家の坊ちやんの方が確に偉い筈である。お照は心に一種の誇を覺れた。

が、それと同時に、主思ひの若い娘の頭には暗い影が翳した。相手の脩は立派な親達を有つてゐる。中學から段々上の學校を卒業して、彼の阿父さんのやうに學士になれるかも知れない。祖父さんのやうに博士にもなれるかも知れない。併し家の坊ちやんは何うであらう。中學以上の學校へ入學するこゝが能るほどの學費が果して盡くであらうか。現在は此方の方が偉くても、先へ行つたら彼に乘越されるやうなことはあるまいか。お照は更に一種の嫉妬の眼を以て、坊ちやんを仲好のお友達をつつくく眺めた。

傍にこんなことを色々考へてゐる人があらうとは、夢にも知らう筈のない二人は、頗に大な口をしてナレオンミウエリントンを戦はしてゐた。先生に教はつたのや、雜誌で讀んだのや、活動寫眞で見たのや色々な材料が一度にこゝへ集けられ、狭い四疊半はウオスターールの氣になつた。

「御免なさい。」

裏口で低い案内の聲が聞かれたので、お照は急に起ち上つた。店の後は茶の間の六疊と列んで、裏所で、外には共同の水道栓が立つてゐた。その周圍の空地には誰が焚いたとも無しに、可愛らしい白粉の花や葉が一叠度つてゐた。美しい蕪餅も三四本ひよろ／＼立つてゐた。近所の飼鶏が何かう／＼と求食つてゐた。

そこに立つてゐるのは五十以上の、見るから人の良き想な老女であつた。手には毛織子の古い洋傘と小さい風呂敷包を持つてゐた。

「あら、西町の阿母さん。」

お照は懐しうに此の老女を迎へた。

「兄さんは……。」

老女は奥に氣を乗せらうな様子で訊いた。

「今日は朝早くから出ました。」

「日曜でも出るの。随分忙しいのね。」

「まあ、お上んなさいよ。」

「入つても可いの。」

老女は烏渡背後を見かへつて、下駄を脱いだそれから足袋を脱いで、二三度其の腰を掃て又穿いた。下谷の西町から歩いて來たらしかつた。

●新刊雜誌

- ▲大道叢書(三二七) 小石川開口町大道社
- ▲後援(九月) 牛込若宮町帝國軍人後援會
- ▲新報界(九) 大阪北野角田町工業教育會
- ▲外國貿易月表(九月) 東京中橋區福壽堂
- ▲通商公報(二四六) 日本橋本町三越吳服店
- ▲三商(九) 神田三崎町開中央會
- ▲産業組合(一一九) 小石川宮下町農友社
- ▲農家(九月) 神田二崎町三音樂社
- ▲音楽界(九月) 神田二崎町三音樂社
- ▲婦女新聞(七八九) 牛込津久戸婦女新聞社
- ▲日本及日本人(十五) 神田區通倉町政教社
- ▲通俗教育(五五) 牛込富久町通俗教育會
- ▲現代の國策(九月) 名古屋屋敷町 深田
- ▲冬木(九月) 小石川竹早町 冬木
- ▲雑誌俱樂部(十月) 神田區駒込坂下 雜誌社



鳥籠

岡本綺堂

(三)

老女は六疊の茶の間へ通された。次の間の四疊半ではウオータールートの戦がまだ終らなかつた。彼女は少年の聲に耳を立てた。

「坊ちゃん、お内ですね。」

「わ、學校のお友達が被入つて。」

「そりや丁度好い。」老女は風呂敷をあけてカル、ス煎餅の袋を出した。

「あの、少々ばかりですがね。これを坊ちゃんに……。」

「まあ、お照は嬉しいやうな、驚いたやうな顔をした。彼女は煎餅の袋を置いて茶單筒の上に置いた。さうして、茶を淹れる仕度を取か、つた。

「もう構はないで下さいよ。お彼岸になつても、お天氣が好いよ未だ暑いこ



老女は丁寧に疊んである手拭を出して、額際を軽く拭いた。

「姉さんはお變りはありませんか。」

「お照は茶を出しながら訊いた。

「はあ、相變らず丈夫ですよ。」

云ひかけて老女は口を噤んだ。お照も少時黙つてゐた。老女は小さい賣入を出して一服喫つた。

「賣は今日来たのは他ぢやアないんですが……。」老女は四疊半の方を俤るやうに一膝進めて聲を低めた。

「お秀のこつてすがね。兄さんは彼女のこゝを何う思つてゐるでせうね。」

「兄さんは其後何にも云ひませんが、妾には能く判りませぬけれど……。」

姉さんが歸つて来て下さるに本當に可いんですけれどね。」

お照の聲は少しく陰つた。それと反對に老女の顔色は稍や活きて来た。

「ちや、お照さんはお秀に歸つて来て貰ひたいと思つてお在なんですね。」

「さうなれば何んなにか嬉しいんですけれど……。」

不可ませんかね。」

彼女は恨むやうに、甘ゆるやうに相手の顔を偷み視た。

「お前さんが然う思つてゐて呉れば、妾の方でも大變に嬉しいんですがね。お秀も利かない氣の女だから、あ

して喧嘩をして出て来たもの、お前さんは仲好だつたし、兄さんとも別に何う云ふ譯でもなし、約りはあ

の……。」老女は煙管で横越しに四疊半を鳥渡指した。坊ちゃんのこと

が……。」お秀も今基で……。」お秀も今

ぢやア後悔してゐるんですよ。何しろ廿一の時にこの家へ来て、足かけ七

年も睡じく暮してゐたんですよ。彼女も人情にしても此處の家が戀しいの

が當然であらね。成ほど一旦は詞の行き懸りで、出るの遅くの云ふやうな

ことになつたもの、能く考へて見りやア間違つた話で……。」そりやア妾も

其時に呉々も云つて聞かしたんですけれど……。」い、わ、まあ、濟んだこ

は仕方がないとして、何うでせう、もう一遍お秀を此方へ何して下さる譯に

は……。」彼女も此頃は全然後悔して

てね。夕方なんぞになるに、寂しさうな顔をして茫然嘆息ばかり吐いてゐる

んですよ。」

わが娘が可愛いのか、老人の聲か、老女は幾たびか窪んだ眼を睨いた。

嫂の寂しい今の境界を思ひ遣つて、お照も何だか悲しくなつた。

「で、俤がお願ひに出るのが願當ですけれど、若い者はそんなお話をする

のを思ひがりますし、お秀も弟に頼むよりも妾の方が頼み、見られて、阿母

さんは非行つて来て呉れ云ふんでせう若さうなれば妾も安心ですから面目

の悪いのを我慢して到頭斯うして御相談に出たやうな譯なんですが……。」

わ、お照さん。お前さんから兄さんにも能く其譯を話して下さい……。」

「そりやもう姉さんが歸つて下さりやア、妾も大變嬉しいんですから、兄

さんにも能く話しまして……。」妾も其後姉さんに一度逢ひたいと思つて

も、此の通り無人ですから夜も晝も家を明けることが些も出来ないでせう

ね、阿母さん。家へ歸つて姉さんに逢つたらば、妾が戀しがつて泣いてゐる

こと然う云つて下さいな。」

口ばかりで無く、彼女は本當に泣いてゐた。老女も疊んだ手拭を眼に當て

た。

四疊半でも戦争の話が續つた。

讀者の聲

▲記者諸君、御多忙中にも拘はらず讀者の聲に御垂力下されし段覆者一同に代つて感謝仕ます今後以前通り此覆者の聲即ち讀者の心の見ゆるやうにして欲しいと思ふ(學生) ▲面白かつた「妹」も終りました。此大も綺堂先生が筆を取られるのは實に嬉しい、前のに優ることも勞らぬ小説が又見られる事實に嬉しい(一少學生) ▲我國現代の教育方針では注し「妹」の松代の如き人格は養成出来まいと思ひます綺堂氏或は此點に着眼して彼の小説を物せられたるに非ざるか、時事新報の「妹」を讀みし人々よ、世の父兄よ、女學校の先生達よ幸に三思あれ(名古屋松井生)



鳥籠

岡本綺堂

(四)

お照の家に波瀾の種を播いた坊ちやん其人は名を無雄と云つて、陸軍少佐貝津彌雄の一人子であつた。父の貝津少佐は日露戦争に出征して、遼陽攻撃戦には殊勲者の一人として世に知られた。その明る年の正月、少佐の一族が黒溝堂附近に駐屯してゐる處へ、ある夜の雪を閉して敵の哥薩克が突然に襲つて来た。敵は固より優勢であつたので我が一族は殆ど全滅の不幸に陥つた。少佐は行方不明となつた。

少佐の平生から推しても、亦牛残つた士卒の報告に因つても、「彼が勇まし



い戦死を遂げた云ふことは何人にも信ぜられた。馬卒の龜坂彌七も主人の少佐殿は確に戦死せられたに相違ない。申立てた。その當時は夜中の混戦で彌七は主人を見失つて了つたのを非常に遺憾としてゐたが、前後の状況から考へるに何うしても戦死したものさ倍するより他はなかつた。彼は少佐の遺品を携へて内地へ歸つた。自分の且それは名譽の戦死を遂げた云ふことが嘆きの中にも彼の誇であつた。

その頃、彌七はまだ獨身で、四谷坂町にある少佐の邸内に、妹のお照と共に寄留してゐた。お照は明けて十歳の少女で、兄が主人に出征してゐる留守中は、奥の方へ引取られて小間使同様に働いてゐた。

彌七が戦地から歸つて来た時には、少佐の邸は涙に満たされた。而も夫人の辰子は軍人の妻たるに駄ぢないだけの覺悟を有つてゐる自ら信じてゐた。故郷心で緊張してゐる彼女の氣分から

云へば、生残つてゐる人間達は皆な命を惜む卑怯者のやうにも見えた。彼女は夫が亡き後を見苦しからぬやうに一切處理して、更に近所の小さい借家に引移つた。今年六歳になる一人息子の雄雄を守り立て、父に劣らぬ立派な相續人を作り上げやうとした。

一家の運濟を節約する結果として奉公人等は總て暇を出された。彌七も無給主と離れた。貝津少佐は學識もあり徳望もある人で、世に在る時は部下の者から非常に敬慕せられてゐた。彌七も其徳を慕つてゐた一人であつた。在りも忠實なる彼を愛してゐたので、彌七の陣中で或時彼に對つて斯んなことを云つた。

「私が戦死したら遺族の面倒を見て遣つて呉れ。お前も知つてゐる通り、私の家には是れ云ふ昵近しい親類も無いから。」

その晩は月の明るい秋であつた。宿舎の前には彌洲の柳が真葉を白く見せて夜風に寂しく靡いてゐた。何處やらで驛馬の聲が悲しく聞けた。彌七は自分が深く慕つてゐる主人から斯う頼まれて、抑へ難き一種の感激と満足とを覺えた。彼は強い聲で即座に答へた。「大丈夫、わたくしが御附き申して居りますから、御安心なさいまし。」

彼は此夜の誓ひを忘れなかつた。再び他人の馬の口を取る料兒が無いのもう一つには新しい主人持の身分となつては、思ふやうに舊主人の遺族の世話も出来ないさ考へたので、彼は馬卒の奉公を思ひ切つた。幸ひに通りの某筆は能るので、彼は便を求めて某會社の集金人に雇はれた。其の身許保證金は貝津の未亡人が出して呉れた。

彼は坂町の貝津家から遠くない所に狭い裏家を借りて、妹と一所に世帯を持つた。さうして日々通勤の傍に主人の家を見舞つてゐた。未亡人之心を協せて死んだ旦那様の坊ちやんを偉い人に仕立てるのが、自分の一生の役目である。彼は固く信じてゐた。

「坊ちやんも小さいが俺だつて若い。もう仕年の辛抱だ。こゝは彼は希望を造るに未來に繋いで、汗を流して働いてゐた。

未亡人も堅固に家を守つてゐた。表面は寂しいながらも各自の胸には未來の春を描いて、貝津一家も彌七兄妹も平和の日を送つた。

併し其の平和状態も永続しなかつた。まだ一年を経たない中に、おそろしい鐵槌が天から突然に降つて来て、貝津一家に彌七を滅茶々に切ち壊して了つた。

貝津少佐は生きてゐた。少佐は捕虜となつて敵國に生きてゐたのであつた。

川柳 劍花坊選

一人者足袋の破々墨を塗り 柳光
黒船で先丁下船の腹を抜き 春洋
黒髪を切るはめかけの黒い顔 一風郎
おしろいの方で嫌々黒い顔 一風郎
▲次回の川柳題、「人生の秋」「天狗」
廿五日、切川紙端著、各願別紙、敢を不、限、歌句川柳挿宛